別紙様式３（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　　楠元　実子

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

Daughters Searching for Their Identity: A Study on Ethnic American Literature by Women

（和訳）アイデンティティを探求する娘達――アメリカ・エスニック女性文学研究

論文要旨（別様に記載すること）

（注）１．論文要旨は、A4版とする。

２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。

３．「論文要旨」は、フロッピーディスク（１枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

Daughters Searching for Their Identity: A Study on Ethnic American Literature by Women

（アイデンティティを探求する娘達――アメリカ・エスニック女性文学研究）

楠元　実子

要旨

本研究はアメリカのエスニック・マイノリティ女性作家であるトニ・モリスン（アフリカ系アメリカ人）とジャメイカ・キンケイド（カリブ系アメリカ人）の作品を取り上げ、作品の中の母と娘の関係に焦点を当てたものである。娘という立場の主人公とそれぞれの母親との関係を周囲の人間との関係も考慮しながら比較することで、アメリカのエスニック・マイノリティ女性作家における家族像、娘のアイデンティティ探求の問題を受け彫りにすることを目的としている。

序章においては先行研究を整理し、論文の目的、位置付け、意義を述べた。アメリカのエスニック・グループの特殊性や多文化主義の深まりに触れ、偽の作家が現われるほどマイノリティ文学が隆盛を極め、フェミニズム文学批評が高まり、母娘関係のテーマが扱われるようになるまでの流れをまとめた。そのテーマはエスニシティやジェンダーにおいて下位に置かれがちであるという環境要因から、よりデフォルメされた形でエスニック・マイノリティの女性作家の作品で扱われている。彼女らが活躍し始めたのが 1970 年代以降であり、また母娘関係のテーマは他の文学ではほとんど扱われていない。よってアメリカ文学における母娘関係の先行研究については、未だ日本においてはもちろん、アメリカにおいても論評が少ない。本研究の特色は、日本におけるマイノリティ文学の普及と、女性学にもかかわる現代社会における母娘関係の解明にも役立つ点であると位置づけた。先行研究としては、小林喜久子が『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家』(2006)の最終章でアジア系アメリカ人女性作家の作品を扱ってはいるものの、６章中、第５章までは白人中産階級の女性作家の作品を中心に論じており、マイノリティ女性作家の作品を集中して論じるという課題は残されたままとなっていた。また、杉山直子が『アメリカ・マイノリティ女性文学と母性―キングストン、モリスン、シルコウ』(2007)において、マイノリティ女性作家の作品だけを扱った論評を出してはいるが、母親の母性という視点で作品を論じているため、母娘関係における娘からの視点が欠落しており、また複数の作品を並べての比較対照、同じ作家の複数作品におけるテーマの発展の掘り下げなどが次の研

究者が取り組む課題として残されていた。以上のように、マイノリティ女性作家の作品は研究され始めたものの、マイノリティ女性作家の作品に絞り、複数の作品をまたいだ形で考察したものを扱う先行研究はまだほとんどない状況を踏まえ、本研究においては今までなされていない『ビラヴド』(1987)と『アニー・ジョン』(1983)の比較研究を行う点、娘の立場から母娘関係を論じる点、エスニシティをまたいでマイノリティ女性作家の複数作品の比較対象研究を行う点、同じ作家の前後作品でテーマの発展を掘り下げる点において意義が認められる。

第１章においてはそれぞれの代表作である『ビラヴド』と『アニー・ジョン』を取り上げ、第２章の母娘関係の議論の前段階として、娘である主人公のデンヴァーとアニーのそれぞれの家族の詳細な検討を行い、娘に対する家族の役割を整理し、そこに母国の要素が入っていることを指摘した。祖母は母国の自然を表し、窮地に陥ったとき母の代わりとして孫娘を癒し、共感をもたらす人物である。デンヴァーの祖母は和を重視するが、アニーの祖母は周囲から自由な存在である。父親は母国の制度を表し、その不在傾向は母と娘が密着する原因となる。デンヴァーの父は制度の犠牲者となり死んでいるものの娘との精神的なつながりがあるが、アニーの父は生きているがつながりはあまりない。兄弟は母国の制度の恩恵を受ける者を表すが、兄弟に対してデンヴァーは共感を、アニー/ルーシーは敗北感を感じる。姉妹については経験を共有し娘本人や母の代替の役割を果しているが、デンヴァーは自分の感情を出すことができるが、アニーは本音で語り合うことができない。

以上の検討結果を俯瞰して、デンヴァーの家族の調和傾向、アニーの家族の分離傾向という異なる方向性を指摘した。それは２章以降で論じる娘のアイデンティティ形成に影響を与える。

第２章は最も中心となる章であり、娘のあり方、母やその他の人との関係を詳細に分析し、両作品の母娘関係の特徴や構造を明らかにした。娘、母、母以外の家族を含めたその他の人々が抱く気持ちを肯定的（愛情）感情と否定的感情に分けてそれぞれについて特徴をまとめ、比較を行い、娘の最終決断に至るまでの気持ちの変遷を考察した。発達心理学者であるエリクソンのライフサイクルによるアイデンティティ論を分類のために援用し、発達段階の８つのステージを初めから学童期まで、それから思春期からその後と４ステージずつ２段階に分け、その段階でのそれぞれの項目による用例を丹念に分析し特徴を明ら

かにした。また母と娘とその他の人（母以外の家族も含める）の関係性をわかりやすくするために図表で表し、比較を行った。

まずは作品に描かれる娘から母に対する肯定的感情として愛情を中心に共感、一体感、憧れ、嬉しさなどの感情を検証し、母と娘の間の愛情の質、内容の考察などから母と娘の関係性を探った。デンヴァーの場合は始めから母から娘への愛情がなく、相互の愛情のやりとりがなかったが、娘が成長し、他人の助けを借りて母親に愛情を向けることができるようになる。アニーの場合は学童期までの娘から母親への愛着が強いため、それが拒否された際、自分の存在や価値観が拒否されたととらえてしまい、娘は母を含めた周囲に愛情を向けることができなくなってしまう。

また、喪失感、寂寥感、疎外感、嫌悪感などの娘、母、その他の人々の間における否定的な感情の質、内容や母と娘の関係性、それからこれらの感情をどのように娘が消化していくかを同じような方法で考察した。デンヴァーもアニーも学童期までは母親に殺される恐怖、見捨てられ不安、憎しみなどの否定的な感情を抱く点は同じである。しかしその後の娘の感情の向きが異なり、第３者に母の代替となる人を見つけ、言葉に出して否定的な感情をぶつけることができるデンヴァーに対して、アニーは気持ちを言葉に出せず、母親に感じる一体感が強過ぎることにより執着をさらに強め、愛情と憎しみの相反する感情を一層強く母親に向ける。

娘と母の関係性の変遷から娘の最終決断をまとめると、両作品のプロットや設定には共通点が多くみられるものの、結末は対照的なものになっていて、デンヴァーは母親との関係を維持した形での旅立ちを行い、アニーは物理的に遠いところへ逃げて母親を完全に切り捨てる旅立ちを行っている。デンヴァーは母親から母親らしい愛情を受けることがなく、自分のアイデンティティを終始、母親から離れたところに置いていたが、母親の感情を理解して存在を受け止め、最終的には母親を「守る」という決断に至る。アニーは幼少時、母親から愛情を受けていたという幻想から母親を自分と一心同体と見なし、母の愛情を失うことは自己の存在自体の脅威であると考え、最終的には自分から母親を「捨て去る」という決断に至る。

さらにエリクソンの「個体発達分化の諸領域」の表を用いて、一般的な発達段階との比較を行った。両者ともライフサイクルの第３期までは「重要な対人関係の範囲」は母だけであり、人間関係が非常に狭いという共通点がある。相違点としては、ライフサイクルの第４期においてデンヴァーは「重要な対人関係の範囲」における対人関係が母以外にない

ため「不活発」につながってひきこもっていた点、またアニーが第５期において「仲間集団と外集団；リーダーシップのモデル」が不在であるゆえに「拒絶」につながって母の否定をしていた点が比較によって確認された。また、母と娘の力関係のバランスについてデンヴァーには母と力関係が逆転するターニングポイントがあるが、アニーにはそれがない。そのため旅立ちがデンヴァーによる母の内包、アニーによる母の切り離しにつながっている。

以上の母親と娘の関係の検討結果からわかることは、愛情のやりとりにおいてデンヴァーは第３者の存在によって母へと到達することと、アニーは母親への強すぎる愛着が娘から母へと一方向にしか向けられていないという構造である。また否定的な感情においては両者ともに共通して経験するプライマル・シーン（両親の性行為の目撃）が娘にとって精神的な打撃の決定打となり、デンヴァーは母親から見捨てられ感、アニーは疎外感を味わう。デンヴァーは他人に母親の代わりを努めてもらうが、アニーは母親との関係を膠着状態のまま維持し、母への否定的な感情を強め破滅的状況にむかい、その場から旅立ちで逃げ出さざるを得なくなっていた。このような結末の違いが必然的に生じていることを分析結果から明らかにした。

さらに第３章においては同じ作家におけるテーマの発展を掘り下げるためのケーススタディとしてモリスンの『ビラヴド』(1987) の年代的にその前後作品となる「レシタティフ」(1983) と『ジャズ』(1992) を扱い、第２章において述べた母娘関係のテーマが『ビラヴド』とどのように関連しあい、発展させられているのかを論じた。「レシタティフ」と『ジャズ』両作品ともに母親が不在であるという点で『ビラヴド』とは異なる角度から、よりつきつめた状態で母娘関係が追及されている。

批評があまりされていない「レシタティフ」であるが、従来の人種のテーマではなく、母娘のテーマとして読むことができる。時代設定は 1950 年代、ブラウン判決後の白人と黒人の統合教育の是非が議論されていた時代におかれている。２人の娘トワイラとロベルタのそれぞれの母親は生存しているものの、育児放棄をしている。孤児院に預けられた２人の娘が大人になってから少女時代に抑圧した記憶の内容を考え、再び語り直し、それぞれの母に対しての記憶を共有することによって自己を受け入れる。「レシタティフ」で重要な要素として描かれる娘同士の連帯のテーマであるが、『ビラヴド』においては、白人と黒人間も含めた娘間の連帯だけでなく、母とそして周囲のコミュニティとの連帯へと関係が発

展させられている。

次に『ビラヴド』の後の作品である『ジャズ』であるが、1920 年代のグレイト・マイグレーションという黒人の北部への大移動の時代に舞台設定がされており、主人公の娘ヴァイオレットと死亡している母との関係を検証した。この作品では『ビラヴド』のデンヴァーと比べると、母が自殺して不在であるというさらに厳しい状況の元で、娘が母を理解することが追及されている。娘ヴァイオレットの行動および言葉を詳細に分析することによって、彼女は訳がわからなくなって狂ったという従来の批評の読みではなく、母を理解するために意図的に狂乱状態を装って母の行動をたどっていたことを明らかにした。それによって、従来の解釈にある環境に負けた無力で弱い娘像とは全く異なったたくましく生きる力を持った積極的なヴァイオレット像を提示することができた。

またデンヴァーからは世代的にも、年代的にも経験を増した娘ヴァイオレットであるが、彼女はアリスという同世代の女性に実の母が行うことができなかった精神的な母の代わりをしてもらい、新たに娘としての経験を加えることによって、死んだ母親の理解を行い、その後、今度は自分が生物学的な母にならずして次世代へと経験を継承するという使命を果たしている。ここでモリソンは血縁を越えた女性同士の世代継承をも伝えようとしている点を指摘した。

「レシタティフ」と『ビラヴド』で同時代に生きる女性たちの絆の横の広がりが描かれていたが、『ビラヴド』から『ジャズ』へは知識や経験の次世代の娘たちへの縦の継承を描くことで、黒人全体の連帯や前進をモリスンは示唆している。また、現代においては娘が母との距離を縮める努力をし「本物の自分」を獲得し力強く前進する必要性を伝えている。

以上の議論でいくつかの特徴が明らかになったところで、結論でさらに考察を加えた。第１章では娘をとりまく家族の役割からすでにデンヴァーの和を育んでいく傾向とアニーのそうでない傾向が表れていた。家族は「母国/コミュニティ集団」の何らかの役割を担い、その役割は母国の制度を反映している。アニー、デンヴァーともに制度から自由ではない閉塞感のある家庭がマイノリティの問題の一つであるが、祖母に代表される自然とのつながりが娘の精神的な落ち着きを得る助けになっている。

また第２章の母娘の関係の分析からはデンヴァーの控えめで関係をつないで発展させる傾向、アニーの母への感情の強さと膠着状態の傾向が明らかになった。娘は母親が制度の被害者と認知すればデンヴァーのように同じ弱者として母親に対して協調傾向を持つ。ま

た娘が母親は支配側にいると認知すればアニーのように母親に対して拒否感を持つ。母を守るにしろ捨てるにしろ、それぞれの娘たちが状況の中で悩み、努力を重ねて、母との関係を超えてアイデンティティを確立するために選んだ道が最終決断となっていた。両作品の舞台となる時代が『ビラヴド』は19世紀半ばの南北戦争前後、まだ黒人は従うしかない時期、『アニー・ジョン』は20世紀半ば、アンティグアが植民地時代から独立へと向かう時期であったという時代的な影響も反映されているが、モリスンとキンケイドが最も主張したかったのは、母親から十分に愛された記憶が得られずその後も長く苦しむほど娘に影響を与える制度への糾弾である。またその中においても自分のアイデンティティを形作るための選択をし前進する娘たちの力強さも描いている。

そして第3章では1950年代と1920年代という最近における母と娘の関係で（同時代の人々と）横に、（次世代へと）縦にと女性達を大きくつなぐ存在としての娘の積極的な役割が描かれていることが明らかになった。

「レシタティフ」、『ビラヴド』、『ジャズ』と3つの作品が進むにつれ連帯の発展だけではなく、傷を癒し、母を守り、経験を後世に伝えるという娘の理想像に発展性が見られる点を踏まえると、作家が娘に込めた思いが強くあることが考えられ、また、第2章においてデンヴァーとアニーの最終決断に違いがあったのは、作家の見解が大きく反映されているためであり、それぞれの経験や考えをモリソンはデンヴァー、キンケイドはアニーとして表現していると考えられる。

作品を比較対照して検討することにより、それぞれの作者の意図の違いがより明確になった。デンヴァーは境界を超えた架け橋としての娘という生き方を目指し、アニーは母を愛しつつも否定することで前進する（自分が選択した）エイリアンの生き方を目指し、モリスンは「連帯」、キンケイドは「孤立」を深めたアイデンティティを形作るということを結論として挙げる。

以上、アイデンティティ観が外部からの流入や内部の差異などで分化し混淆を繰り返して大きく変化していく今、モリスンとキンケイドの作品の母娘関係からあぶりだされる娘のアイデンティティの特徴が明らかになった。エスニック・マイノリティという独自性と母娘関係というテーマの普遍性から本研究が現代社会に貢献することを目指した。今後の課題としては、メキシコ系や中国系、ネイティブ・アメリカンなど他のエスニック・マイノリティ女性作家の娘のアイデンティティについて調査を行い、白人女性作家の視点も加え、包括的な研究として完成させることが必要である。